



表紙 仏花
石川 真樹 [茨城1組 福法寺]

花材 キンバデマリ、菊、小菊、
花桃、カーネーション、
ドラセナ類、レモンリーフ



Shinran
850th
800th

—〈2023年 宗祖親鸞聖人御誕生八百五十年・立教開宗八百年 慶讃テーマ〉—

南無阿弥陀仏
人と生まれたことの意味をたずねていこう

東京教区教化委員会報 ネットワークナイン

発行日 2022年3月1日

編集 教化委員会広報・出版部門

『ネットワークナイン』班 編集員
総編集長：本田 彰一（東京1）
チーフ：中村 晃（茨城1）
佐々木誠信（東京4） 朝倉 俊隆（東京5） 五島 大地（東京8） 小田 俊彦（茨城1） 大山 信敬（茨城2） 佐々木 萌（長野5）
チーフ：田上 翼（茨城1）
坂東 性悦（東京2） 平松 正宣（東京3） 櫻田 純（東京6） 秦 顕生（湘南） 和田 祐樹（三浦）
チーフ：田宮 真人（東京8）
土岐 孝広（東京1） 内藤 友樹（東京1） 渡邊 尚康（東京3） 相馬 法道（茨城1） 鞠川 卓史（湘南）

発行 真宗大谷派東京教区教化委員会
〒177-0032 練馬区谷原1-3-7東本願寺真宗会館
TEL. 03-5393-0810 FAX. 03-5393-0814 Email. nw9@ji-n.net
ご意見、ご感想は上記連絡先までお願いします。

もくじ

宗祖親鸞聖人御誕生八百五十年・立教開宗八百年慶讃事業

●03 オンラインお待ち受け大会

特集 全国水平社創立100周年記念

水平社創立の願いと

●05 私たちの歩み

●13 法語ポスター

教区教化通信 教学館

●15 第8期 教学館を終えて 花園 一実

はい！こちら真宗会館です

●16 駐在日記 渡邊 誉

はい！こちら真宗会館です

●17 所員のつぶやき 関 得道

●19 敬弔・涌 土岐 孝広

Shinran 500th

宗祖親鸞聖人
御誕生八百五十年
立教開宗八百年慶讃法要

東京教区
お待ち受け大会

南無阿弥陀仏
人と生まれたこと
の意味をたずねていこう

2022年6月13日(月)

ライブ配信
LIVE 13時30分開会 15時30分閉会

YouTube

主催 真宗大谷派東京教区

Shinran 500th

—(2023年 宗祖親鸞聖人御誕生八百五十年・立教開宗八百年 慶讃テーマ)—

南無阿弥陀仏

人と生まれたことの意味をたずねていこう

東京教区500カ寺からつながるオンラインお待ち受け大会

親鸞聖人の御誕生を喜ぶということの根底には、何はともあれ、わが身の誕生が受け取れるか受け取れないかということが、問われているのです。けれどそれは、自我で生きる今日の私からは出てこないのです。(中略) 南無阿弥陀仏を聞くご縁にふれて、初めて「人と生まれたことの意味をたずねる」ということが、与えられてくるのですね。

(真宗本廟お待ち受け大会 池田勇諦師記念
法話「慶喜奉讃に起つ」より)

※「真宗」誌2021年6月号掲載
2023年の「宗祖親鸞聖人御誕生八百五十年・立教開宗八百年慶讃法要」に向けて、このたび「東京教区お待ち受け大会」を開催いたします。この私に届いてくださった南無阿弥陀仏の呼び声を聞くということ、生きてはたらく事実としての南無阿弥陀仏に出遇うということ。このことをご一緒に尋ねてまいりたいと存じます。

コロナ下にあつてオンライン開催となりますが、「東京教区500カ寺からつながる」をスローガンに、教区はもとより世界中の御同朋とつながることを願って配信を行います。皆さまのご参詣を心よりお待ちしております。

「慶讃法要・慶讃テーマ」のポスターが

東京教区ホームページ「暮らしにじいーん」から

ダウンロードできます!!

真宗大谷派（京都・東本願寺）

2023年 宗祖親鸞聖人御誕生八百五十年・立教開宗八百年慶讃法要

テーマ

『南無阿弥陀仏』

人と生まれたことの意味を

たずねていこう

法要期間

- 〔第一期法要〕2023年3月25日～4月8日
- 〔讃仰期間〕2023年4月9日～4月14日
- 〔第二期法要〕2023年4月15日～4月29日



↑テーマの趣旨・願いについてはこちらをご覧ください。

The 850th Celebration of Shinran Shōnin's Birth and the 800th Anniversary of the Establishment of Jōdo Shinshū

Theme

**Namu Amida Butsu
To Discover the Meaning of Being
Born as Human Beings**

東京教区で作成しました「慶讃法要・慶讃テーマ」のポスターが東京教区ホームページ「暮らしにじいーん」からダウンロードできます。ダウンロードしていただければ、ご寺院、ご自宅のプリンターでお好みのサイズに印刷できます。縦長サイズですので、掲示板のちよっとしたスペースに掲示いただくなど、ぜひご活用ください。

～全国水平社創立100周年記念特集～

水平社創立の願いと 私たちの歩み



人の世に熱あれ、
人間に光あれ

やまだこのじろう

写真：全国水平社創立大会で少年代表として演説をする山田孝野次郎氏

今年の3月3日は、全国の被差別部落の人びとによって、1922（大正11）年に創立された「全国水平社」の創立大会からちょうど100年目という、記念すべき大きな節目にあたります。

今回の特集は、東京教区「同和」協議会より高口喜美子会長（埼玉組・得信寺）、前田祐真副会長（山梨組・善福寺）、研究班主査である井上英実氏（長野1組・光蓮寺）の3名をお迎えし、水平社の成り立ちから、宗門の抱える課題や教区内での取り組みについて広くお話を伺っていきます。

部落問題のみならず、人種差別や性的少数者への差別、コロナ禍での感染者差別など：今日も世界中にありとあらゆる差別の問題が渦巻いています。しかし、真宗の教えにご縁をいただく私たちにとって、この問題は単なる「ヒューマニズム」で語られるべきではなく、私自身が根底に抱えている差別の心を今一度見つめ直す機縁に他なりません。

100年前の水平社創立に込められた大いなる願いに改めて触れながら、これまでの歴史を学ぶことを通して、各人のこれからの歩みにつながっていくことを願っております。

宣言

全国に散在する吾が特殊部落民よ團結せよ。

長い間虐められて来た兄弟よ、過去半世紀間に種々なる方法と、多くの人々によつてなされた吾等の爲めの運動が、何等の有難い効果を齎らさなかつた事實は、夫等のすべてが吾々によつて、又他の人々によつて毎に人間を冒瀆されてゐた罰であつたのだ。そしてこれ等の人間を勦るかの如き運動は、かえつて多くの兄弟を墮落させた事や想へば、此際吾等の中より人間を尊敬する事によつて自ら解放せんとする者の集團運動を起せるは、寧ろ必然である。

兄弟よ、吾々の祖先は自由、平等の渴仰者であり、實行者であつた。陋劣なる階級政策の犠牲者であり男らしき産業的殉教者であつたのだ。ケモノの皮剥ぐ報酬として、生々しき人間の皮を剥ぎ取られ、ケモノの心臓を裂く代價として、暖い人間の心臓を引裂かれ、そこへ下らない嘲笑の唾まで吐きかけられた呪はれの夜の悪夢のうちにも、なほ誇り得る人間の血は、涸れずにあつた。そうだ、そして吾々は、この血を享けて人間が神にかわらうとする時代にあつたのだ。犠牲者がその烙印を投げ返す時が来たのだ。殉教者が、その荊冠を祝福される時が来たのだ。

吾々がエタである事を誇り得る時が来たのだ。

吾々は、かならず卑屈なる言葉と怯懦なる行為によつて、祖先を辱め、人間を冒瀆してはならぬ。そうして人の世の冷たさが、何んなに冷たいか、人間を勦る事が何んであるかをよく知つてゐる吾々は、心から人生の熱と光を願求禮讚するものである。

水平社は、かくして生れた。

人の世に熱あれ、人間に光あれ。

大正十一年三月三日

全国水平社創立大會

◆水平社創立の目的

全国水平社が結成された当時の水平社の方針が端的にまとめられた『綱領』(資料1)の最初に、「特殊部落民は部落民自身の行動によつて絶対の解放を期す」とあります。水平社が創立された目的は、この「絶対の解放」です。彼らはその目的に向かつて、自分たちの中から行動を起こしたのです。

また、この『綱領』の中では、自らのことを敢えて「特殊部落民」と自称していることに留意しなければなりません。なぜならば、創立大会の『決議』(資料2)に「吾々に對し穢多及び特殊部落民等の言行によつて侮辱の意志を表示したる時は徹底的糾弾を爲す」と、「特殊部落民」という言葉が差別的な意味合いで使われた場合には糾弾すると述べられているからです。ここに力強いメッセージが込められているように思います。

◆部落としての誇り

現在も解放運動の中で言われていることですが、それは「部落としての誇り」です。『宣言』に「吾々がエタである事を誇り得る」

という表現があります。中世以来、それらの蔑称で差別をされてきたけれども、同時にその職業やポジションの中で「誇り」を持つて生きてきたのだと、全国の仲間たちと呼び掛けました。

自分たちの歴史的背景を見つめ直して、『綱領』に「人間性の原理」という言葉で表される『尊厳』を改めて確かめ合いながら、「自分が劣った位置にいて、そこから向上していこう」というのではなくて、あくまでも「自分たちの存在に誇りを持つ」というところが出発点なのです。

因みにこの『宣言』は、創立大会の際には満場の拍手をもって承認されました。これは西光万吉(※1)が、社会運動家の平野小剣らとともに、その時代の言葉で練り上げていった文章です。「男らしき」や「産業的殉教者」などといった、現代にはそぐわない表現も見受けられますが、これらは当時の時代状況から出てきた言葉です。また、こうした語句に関して、ここ20年くらいは問題提起されているのも事実ではありますが、西光たちが一生懸命に「自分たちの解放を勝ち取るんだ」との想いで書いた文章という意味において、その価値は変わらないと思います。

資料1

綱領

- 一、特殊部落民は部落民自身の行動によつて絶対の解放を期す
- 一、吾々特殊部落民は絶対に経済の自由と職業の自由を社会に要求し以て獲得を期す
- 一、吾等人間性の原理に覺醒し人類最高の完成に向つて突進す

資料2

決議

- 一、吾々に對し機多及び特殊部落民等の言行によつて侮辱の意志を表示したる時は徹底的糾弾を爲す。
 - 一、全國水平社本部に於て吾等團結の統一を圖る爲め月刊雑誌『水平』を發行す。
 - 一、部落民の絶對多數を門信徒とする東西兩本願寺が此際吾々の運動に對して抱藏する赤裸々なる意見を聴取し其の回答により機宜の行動をとること。
- 右決議す

大正十一年三月三日

全國水平社創立大会

◆融和運動に對峙して

水平社創立に至る時代的な背景として、『宣言』に「過去半世紀間」という言葉があります。この50年間とは、いわゆる「解放令」(※2)の名のもとに、「同情融和運動」が行われてきた期間を指します。

この運動には、「ロシア革命」や「米騒動」などの社会不安に起因する治安悪化に伴い、「不穩分子を生み出さないように」良き社会人として教育していこう」という政治的な狙いがありました。ですから、その内容は「衛生状態を良くして」とか「礼儀正しくして」といった、部落の外側から押し付けられ

る期待や要求に応えて「こういう人間にならなきやいけない」というものだったのです。

融和運動について、『宣言』では「これ等の人間を勦（い）わめるかの如き運動は、かえつて多くの兄弟を墮落させた」と指摘しています。この「外側から部落の中へ」という融和運動の在り方に対して、水平社は「此際（このとき）吾等（われら）の中より人間を尊敬する事によつて自ら解放せんとする」と「部落の中から、自分たちが」という、抜本的な方向性を打ち出しました。

◆東西本願寺の差別の歴史

実は、この50年間の融和運動よりもずっと長い間、根深い差別の歴史を抱えてきたのが東西両本願寺でした。本願寺は一言でいえば、「現世の苦しみは、その人自身の前世の行為に原因があり、どうしようもないことだから念仏して来世において救われなさい」と説いて、差別される人生を「諦めの運命」として自覚させようとするような教化を行なっていたのです。

1921（大正10）年に全国の被差別部落を対象に行われた内務省による「宗教調査」の結果、82・1パーセントが、東西両本願寺

をはじめとする真宗のご門徒でした。そして被差別部落の中で厳しい生活を強いられていた人々は、その欺瞞（ぎまん）に満ちた教化のもとで「娑婆（しゃば）を耐え忍んで念仏を称え続ければ、部落の外側の人と同じように往生（おうじやう）の素懐（そがく）を遂げられる」と信じざるを得なかったのです。

ですから、創立大会の『決議』の文中で、「部落民の絶対多数（ぜつたいたすう）を門信徒とする東西両本願寺が此際（このとき）吾等（われら）の運動に對して抱藏（ほうざう）する赤裸々なる意見を聴取（しやうしゆ）し其（その）の回答により機宜（きぎ）の行動をとること」と名指しで言及されているのは、決して「ついで」などではなく、必然的な結果と言えるでしょう。

◆『決議』に対する宗門の答え

この『決議』は今読んできた通り、単なる意見交換の申し入れではありませんでした。「私たちは水平社の運動を立ち上げましたが、教団としては一体どうお考えですか」と、宗門の意向を問うと同時に、「その回答によつては必要な行動を取っていきます」という確たる意思表示でした。

実際に創立大会翌日、水平社の代表6名が東西両本願寺を訪問し、具体的な返答を求め

たのです。この訴えに対して、真宗大谷派は「水平社の趣旨は真宗教義と一致するを以（もつ）て、出来得る限り後援すべし」と回答します。そして本願寺派は「水平社の趣旨は賛成なるも、当本願寺は単独本問題に尽（つく）す考へなり」と応答しました。

つまり東西両本願寺とも、水平社の運動に「一応は」賛成した訳です。しかし、それはやはり「一応でしかなかった」ということなのでしょう。水平社はこの教団側の所見について協議した結果、その翌月の4月10日に両本願寺へ「向後（こうご）二十年間（に）吾等（われら）部落寺院及び門信徒に對し如何なる名義による募財（ぼざい）をも中止されたき事」という『決議通告』を提出しました。

◆御同行御同朋

水平社がこの通告文の中で「募財拒否」の直接的な理由として挙げたのは、部落内の「貧困」でした。しかしながら、同月16日付の『中外日報』において、「我々は単に我等自身の経済的独立のためのみならずその宗教生活を純潔ならしめんが為にも不合理なる本願寺の募財を拒絶する」と述べています。

また、水平社は『決議通告』を出した同日、部落大衆へ向けて『部落内の門徒衆へ！』と題したビラを発行していました。その内容は募財拒否に至った経緯について説明し、賛同を呼び掛けるものです。この文章中には先の「宗教生活を純潔にしよう」という思いが、非常によく表現されています。

一言でいえば「本願寺ではなく親鸞だ」というメッセージが込められていたのです。これまでも純粹な信仰を求めてきてはいたけれど、それは単に「本願寺」という「宗門の体制」のところに留まっていたのではないかと。ビラの中に「御開山の御同行」や「御開山の御同朋」といった、親鸞聖人への深い信頼感が見て取れる表現が何度も出てきます。しかし同時に、「同じ開山聖人の御門徒仲間からさへ人間らしい付合がして貰へませんでした」と、教えをともにしているはずの仲間から「不合理な差別」があったことを訴えているのです。

水平社創立の背景としては、まず「解放令」から半世紀間に亘る融和運動のことが一つ。そして、それよりもずっと長い歴史の中で、本願寺とのこのような関わりが根深くありました。そのことについて、ただ教団を糾弾

するということではなく、「自分たちがそういう関係性を持ち続けてきてしまったということを改めて考えよう」という問題意識が創立に至る大きな背景としてある訳です。



↑ 真宗会館における取材の様子

◆ 宗門としての課題

水平社創立の趣意書である『よき日の爲めに』(※3)には、西光万吉の「吾々の運命は生きねばならぬ運命だ、親鸞の弟子なる宗教家?」によつて誤られたる運命の凝視、あるい

は諦観は、吾々親鸞の同行によつて正されねばならない」という、厳しい言葉があります。「宗教家」に「?」が付いていますね。

この真宗大谷派の教学の立脚地は「本当に親鸞聖人であるのか?」ということですが、水平社創立から100年間、みんながそこを視野に入れて考え続けてきたのかというと、出来ていないのです。御同行を差別することを横目で見ながらも、そんな自分を「親鸞聖人の御同行」ということにして、正すこともせずに、うやむやにできてしまった。その事実をどう受け止めていくのか。

このことは、「是旃陀羅」問題(※4)にも共通すると言えるでしょう。差別について、「制度的にはいけない」とか「心情的に許せない」などと議論することより、まずは「本当に親鸞聖人であるのか?」なのです。西光万吉には、その出発点こそが自分たちの「絶対の解放」につながるはずだという確信があったのだと思います。

◆ 「同和」協議会の取り組みについて

ここ暫くは中世賤民史を中心的に学んできました。水平社については、2016年の

部落問題基礎講座において、関東における水平社の運動について学びましたが、近年、水平社そのものについては研修等で取り上げていません。今後、水平社創立の願いと、そこに込められた課題に深く触れてこられなかった方々とともに、改めて確認する作業も必要だと思えます。

また、宗門の抱える「是旃陀羅」問題も、水平社創立以来100年もの間、問題提起され続けていますので、それも含めて課題として共有していく必要があると考えています。「今何が問題となっているのか」ということを組や各寺院の同朋の会でも共有して欲しい。『ネットワーク9』において、私たちの動きを理解して、各々の現場でも動いてもらえるように、より具体的な内容を掲載していけたらと思っています。

「同和」協議会というところ、どうしても「難しい問題をやっているところですよ…」と言われて距離を取られることが多いですが、一人でも多くの方にその活動を知っていただきたい。毎年、現地学習会として2泊3日で京都市内のフィールドワークをしてきました。実際に現地に出向き、現場を見る中でしか見えてこないことがあります。そのこと

を大切に、今後は更に、教区内の身近な場所のフィールドワークも行なっていきたいと考えています。



毎年、2泊3日で行われている現地学習会では、座学とフィールドワークを行なっている。

差別の問題は、「御開山ごかいさんの御同行ごどうぎょう御同朋ごどうぼう」という言葉から問いを投げかけられてきた宗門の課題であると同時に、「親鸞の門徒」でありたいと願う一人ひとりの課題であると思っています。しかし、なかなか課題を課題として受け止め切れていないのが現状です。すでに投げかけられているその問いを、「真宗教団」に属し、「真宗門徒」を名告なつこつている私たち一人ひとりが、はたしてどのよう

に受け止めてきたのかをもう一度考え直す。それこそが、「自分にとってはどうかだろう」と、「問題」を「課題」にしていく新たな契機となるのではないのでしょうか。

◆種々の差別とこれからの歩み

私たちが部落問題に学ぶ上で、はっきりしておかなければならないのは「自分がどこに立っているのか」ということです。私たちは「当事者」（被差別部落の人々）ではありませんが、同時に「代弁者」でもありません。大切なのは、解放運動の成り立ちうんぬん云々よりもそこから出てきた声を「自分を抜きにせず

きちんと聞く・受け止める」という姿勢です。その向き合い方が大前提となります。

現代、種々の差別がある中、やはり「知る」ということが重要なのではないでしょうか。よく知らないのにもかかわらず、表面だけを見て「知った気になって」判断してしまう。そういう態度が、意図しない差別の始まりにつながることも多いのではないかと感じています。

初めから決めつけて接するのではなくて、人それぞれのたくさんの面を見て、感じて、まずは「知っていく」こと。そうすることで、ようやく会話を始めることが出来ると思うのです。何も知らないのに「そうだそうだ」という形で同調することはどこか違いますよね。まずは「知る」ことから始めてみる。どんな差別の問題においても、それがとても大事なことだと思っております。

ですから、そもそも「差別」とは何なのか、差別を受けている人にとってはどういうことなのか。そういったことを「きちんと学び、考える機会を持つこと」が、何より大切です。そして、水平社創立の目的として掲げられた「絶対の解放」という言葉に込められた願いをいっしょに考えていくことが、大きな指針となるのではないのでしょうか。

大谷派の先輩方は、糾弾されながらも出会

い続けてこられたと思うのです。それは私たちが糾弾を受け止めるべき「当事者」であるという自覚の上に、初めて成り立つ姿勢です。恐らくは聞くに堪えない言葉を浴びせられたこともあったことでしょう。そんな中でも関わり合いを続けていくこと。具体的な解決が思い浮かぶ訳ではありませんが、顔が思い浮かぶような関係性を続けていきたいと思っています。



後列 渡邊 譽 駐在教導 井上 英実 研究班主査
前列 前田 祐真 副会長 高口 喜美子 会長

編集員所感



今回、取材するなかで「知る」ということの大切さを教えていただきました。

私は、差別問題に関する学習会に参加させていただくと、話を聞いたり文面を見ただけなのにもかかわらず、どこかこの問題に対して理解したつもりになっていました。テキストのページを読み込んだとしても、なかなか文面だけでは、当時の香のや塾童といったものを感じることは難しいのにもかかわらず。

そんななかで現地に向かうフィールドワークや、学習を続けていくということが改めて大事なのだとお話を聞く中で感じました。わからないながらも、現場であった場所に赴き、なにか感じていくこと。自分勝手に納得してわかったつもりにならず、わからないながらも学習を続けていくこと。どちらもシンプルなことですが、そのことが私の生活において抜け落ちていることだと思いました。

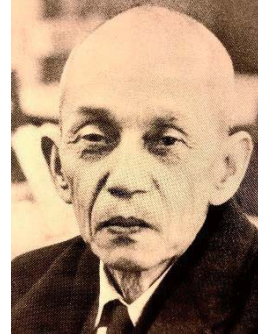
私はどのように向き合っていくのか、そのことを自分自身で問い続けていけたらなと思います。

(田宮班 内藤 友樹)

○註釈

1 【西光万吉】

1895(明治28)年4月17日、葛上郡掖上村柏原の被差別部落に生まれる。本名は清原一隆。



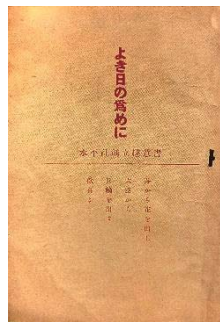
家は浄土真宗本願寺派寺院の西光寺。県立畷傍中学校、京都の平安中学校で学ぶが、いずれも卒業せぬまま上京。絵を学び画家を目指すが、これも果たせずに1917(大正6)年帰郷する。中学校や絵画修業の挫折は差別が原因であったという。帰郷の後、1920(大正9)年結成の燕会に参加。阪本清一郎や駒井喜作らとともに活動するとともに、浄土真宗の素養をもとに、民主主義や社会主義の思想にも学びながら、全国水平社創立の構想を練り上げていった。翌1921(大正10)年末頃までには水平社創立趣意書『よき日の爲めに』を執筆。翌1922(大正11)年には京都の南梅吉らと連絡を取り合いながら全国水平社創立の準備を進め、創立の宣言文を起草した。

2 【解放令】

1871年8月、明治新政府が四民平等の一環として、「穢多」「非人」等の賤民の身分や職業を平民同様にするとした太政官布告。「賤民廃止令」「賤称廃止令」とも。これにより身分差別の法的根拠はなくなり、その後の差別撤廃の運動の拠りどころとなったが、民衆の側も、自己より下位にあつた者が浮上してくることへの危機感から、各地で解放令反対一揆に立ち上がるなど排除・差別の姿勢を持続し、とくに旧穢多身分を中心とする差別は、部落問題として今日にまで至っている。

3 【よき日の爲めに】

1921(大正10)年12月に印刷・発行された、10頁余の「水平社創立趣意書」。発行



人は「水平社創立発起者」―燕会を結成した阪本清一郎、西光万吉、駒井喜作たちである。表紙に「芽から花を出し、大空から、日輪を出す、歓喜よ」と4行の詩文が載っている。文章の多くは、シラー、ロマン・ローラン、ゴーリキらの引用文、聖書と仏教経典の言葉

で綴られている。最後には「人の世に熱あれ、人間に光あれ」と宣言文が付され、水平社創立へとつながっていく。

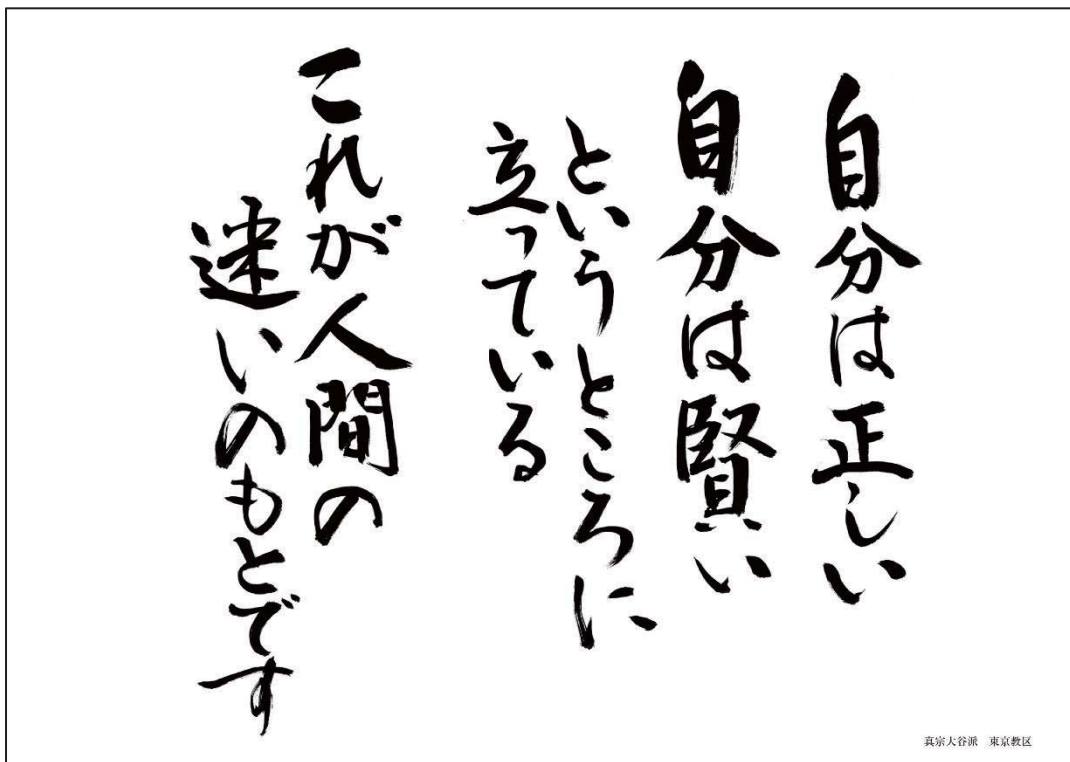
4 【是旃陀羅】問題】

浄土三部経である『観無量寿経』の一節で、母である韋提希を殺そうとした阿闍世王に、月光大臣が「母殺しは旃陀羅のような者の行為」と、諫める場面が出てくる。「旃陀羅」は古代インドにおける特定の階級を表し、賤民を意味する政治的・社会的な差別語である。宗門では、江戸時代、昭和初期まで日本の被差別身分に例えて説明されていたとみられる。

社会の差別構造の温存助長に宗教的な根拠を与えてきたという事実により、経典の語句訂正も含めた対応が求められている。2021年6月、「是旃陀羅」問題に関する決議が、宗門において全会一致で可決され、差別のない社会を求めた、継続的な努力を約束した。

※記事作成にあたり真宗大谷派宗務所発行の『部落問題学習資料集「改訂版」』を参照しました。

今月の法語



書：佐藤 多仙

- ・頒布中「掲示伝道用ポスター」(A2 サイズ)
「掲示伝道ポスターミニ」(ポストカードサイズ)
- ・「掲示伝道用ポスター」が貼れる門徒宅用掲示板を無償設置いたします。
詳細は東京教務所まで。



児童教化連盟 じれん 参加者・スタッフ 募集!!

春の遠足・夏のキャンプ・子ども報恩講を開催しています
また、児童教化に関する研修会（年2回）も行っています
お子様のご参加、スタッフとしてのご参加をお待ちしています




詳しい活動は
←QR (facebook) を
ご覧ください

〔東京教区児童教化連盟 事務局〕
〒130-0012
東京都墨田区太平2-7-1本明寺内
Tel 03-3623-1536
委員長 本田彰一（東京1組）
✉tokyojiren@gmail.com


お問合せは児連事務局まで

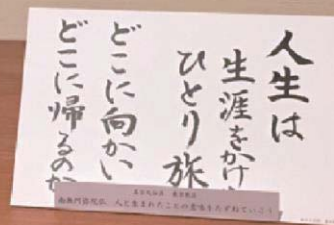
NEW

「**掲示伝道ポスター**」



ポストカード





2017年度 A・B（2種類）
2018年度 A・B（2種類）
2019年度 A・B（2種類）

■各100円
各6枚入
簡易スタンド付き
はがきサイズ
送料250円
（場合によって500円）

東京教区教化委員会広報出版部門では、毎年掲示板に掲示いただくための「掲示伝道用ポスター」を発行しております。
このたび、生活の中でより身近に言葉に触れていただけるように、**ポストカードサイズ**の「掲示伝道用**ポスターミニ**」を発行いたしました！
ご寺院での行事の際に、ご門徒への記念としていかがでしょうか？
お申込み：東京教務所（Tel03-5393-0810/担当:海）まで

第8期教学館を終えて



第8期教学館 主幹 花園 一実

(東京1組 圓照寺)

思えば2018年の11月から始まった第8期教学館は波乱続きであった。新型コロナウイルス感染拡大の影響により、2020年3月より講義は一旦すべて中止。開始から1年と少し経ち、お互いの性格も知られて、いよいよこれからという時期であった。私たちは感染状況を、固唾を飲んで見守った。同年6月から試験的にオンラインでの特別講義を導入、7月には基調講義・特別講義ともに、

完全にオンラインに移行した。当然ながら毎月の真宗会館での宿泊研修や声明講習、例年行っていた緑陰研修やフィールドワークなどは中止にせざるを得なかった。さらには2021年の初めより、専任講師である西田眞因先生が眼を患われてしまったことで、またしても講義は中断となる。幸いに現在、先生の眼は順調に回復されてきているが、この時の分と、オンライン移行までの期間に中止になっていた時期の分も含め、講義の回数を調整するために、修了は例年より半年ほど延びることとなった。他にも挙げればキリがないが、とにかくイレギュラーな出来事が続いた。始めてみて分かったオンラインの大きな欠点は、雑談ができないということだ。「寝食を共にして語り合う」という、教学館がこれまで最も大事にしてきた要素が失われてしまったことは、痛恨の極みであったと思う。他

愛のない会話や冗談、互いの目配せ。オンラインでは伝わりづらい、そういった日常の機微の中に、大切なものが眠っているということに、嫌というほど気づかされた2年間でもあった。

しかし、失われたものばかりを追いかけていても仕方がない。時代は大きく動いていく。親鸞その人が移りゆく時代の中で、和讃に「今様」を取り入れられ、手紙を使った伝道をされ、あるいは「仮名聖教」を執筆されたように、何が起こるか分からない予測不能の状況の中、「教えを聞く」「教えを発信する」ということについて、これからの時代、私たちはもつと柔軟に考えていく必要があるだろう。その際、私たちがこの後半の2年間で経験したことは、それぞれの現場での糧となっていくに違いない。何よりヘッドセットをつけ、眼を閉じながらモニターに向かって説法師せっぽうし子こ吼こされていた西田先生のお姿は、目に焼き付いて忘れ難いものがあった。どのような形であれ、教えがあり、それを聞く人がいるところに、僧伽さんかは生まれ続けるのだ。

はい！こちら真宗会館です

駐在日記



駐在からひとこと

最近読んだ本：『全国水平社 1922-1942
—差別と解放の苦悩』
朝治 武（著）

東京教区駐在教導

渡邊 誉

2001年5月11日、熊本地方裁判所において「らい予防法」を違憲とするハンセン病国家賠償請求訴訟の判決が国に言い渡されてから、20年が経過した。判決は国と社会に対し、大きな問題を提起した。当時福岡県のお寺で法務員をしていた私は前日に水前寺公園で開かれた集会から参加していた。

翌日、私は早朝から地裁の玄関前の近くの木陰に知人たちと判決が出るのを待っていた。その時のことが今も私に問い続けている。原告の一人であった元患者さんは、「第2回真宗大谷派・全国ハンセン病療養所交流集会」で私が担当した大島青松園の方であった。判決の瞬間、弁護団の一人が玄関から駆け出して来た。手にした紙には「勝訴」と書かれていた。沢山の報道陣の力

メウからフラッシュが焚かれ、騒めきと歓喜の声があがった。地裁の玄関前で元患者さん、弁護団、支援者が握手をしたり、抱き合ったりして喜び合っていた。私の周りにいた人たちも一緒になって喜んでいて。私は何故かその輪に入れずに一人で立ち尽くしていた。先ほどの元患者さんが私に近づいてきて急に心配そうに「どうしました」と聞かれたので「正直私は喜べません、私は訴えられた国側にいる一人です…」と呟くように言った。すると「いえ、喜んでください。私と一緒に喜んでください、あなたに喜んで欲しいんです」と私の肩を掴んで揺さぶった。「はい」と答えるのが精一杯だった。この時から私に「支援と当事者」という「問い」が始まった。

はい！こちら真宗会館です



東京教務所次長
関 得道

担当：事務全般の管理
好きな番組：おにぎりあたためますか

私の母と妻がお内仏の餅の前で話している。

母「お父さんはお餅を三段積んで三宝さんて呼んでやったのよ」

妻「仏法僧ですか、そんなふうに呼んでらしたんですね」

ちょっと驚いた。父の口から「三宝さん」なんて呼び名は聞いたことがなかったのだ。毎年、大晦日に門徒さんが餅と橙を用意してくれる。それを私が修正会の荘厳に飾り付ける。子どもの頃から私の役目であったが「餅三つと橙を置いてきて」ぐらいにしか聞いていなかったのだ。父とはお寺のことや儀式作法などを話す機会はあまりなかった。生前に書き残してくれた差定と荘厳の仕方をもとに何とか寺の行事を行っている。昨年は父の七回忌を勤めた。亡くなった当初は、多くの門徒さんが

父に対する思いや、寺であった様々な出来事などを話してくれた。父と門徒さんとの関係や、私の知らなかった父を改めて知ることができて、大変感謝している。これが故人との出遇い直しというものなのかと感じた。最近では父の話より私への期待やお寺の行事への要望が多くなった。責任の重さを実感するが、仕事で週末しか帰坊することができなくて迷惑をかけてばかりである。「三宝さん」は久しぶりの父との出遇いだった。先代住職達を見習って、丁寧に行事や法務を勤めていきたいと改めて思った。

今年の大晦日は息子と一緒に荘厳をするつもりだ。「なんで三段に飾り付けるんやと思う？」と聞いてみようと思う。

教区の情報をおあなたに あなたの声を教区に!!

一緒にネットワーク9を作ませんか?

編集員募集中!!

Network 9

東京教区教化委員会報 ネットワークナイン

取材、原稿執筆、校正、デザインなど、紙面作りに関するすべてを行います。お寺の新聞やチラシを作る時のスキルも学べるかもしれません。パソコン初心者の方でも大歓迎です。先輩編集員が丁寧にご指導します。一緒に楽しいネットワーク9を作っていきましょう。興味がある方、お問合せは東京教務所（担当：佐々木）まで

ネットワーク9へのご意見・ご感想をお寄せください
〒177-0032 東京都練馬区谷原1-3-7 東本願寺真宗会館内 東京教務所
【電話】(03)5393-0810 【ファックス】(03)5393-0814
【mail】nw9@ji-n.net



スマホやパソコンでぜひアクセスを! 東京教区のホームページ

暮らしに
じいーん



www.ji-n.net

検索 暮らしにじいーん

お寺をもっと身近に

多彩なコンテンツ

- じいーん散歩 **New**
- しんらんさまめぐり
- 法話/行事・講座
- なるほど仏事作法
- 寺院検索
- 他

じいーんのお寺も載っています!



スタッフ募集

ホームページ班のメンバーは僧侶に限らず、月に約1回のペースで集い、アイデアを出し合ったり、時には現地取材もしています。ぜひ一緒に活動しませんか? (お問合せは教務所/立野まで)

敬弔

井口 成子 様

東京7組 了見寺 前坊守

1月9日命終 92歳

岩松 正英 様

茨城1組 浄善寺 前住職

1月22日命終 89歳

生前のご功勞を偲び、
念仏合掌して哀悼の意を表します。

1月末日届出迄

涌ゆう

編集員の随筆



皆さん初めまして。少し前より先輩方にお誘いを受け参加させていただいております。東京1組等光寺の土岐孝広でございます。

私自身お話しするのは好きですが、下手なので、お見苦しい文も有るかもしれませんが、よろしく願います。

「本当の狂気とは何か？ 本当の狂気とは。夢におぼれて現実を見ないのも狂気かもしれないぬ。現実のみを追って夢を持たないのも狂気かもしれないぬ。

だが、一番憎むべき狂気とは、あるがままの人生に、ただ折り合いをつけてしまっ

て、あるべき姿のために戦わないことだ。」
by セルバンテス 『ラ・マンチャの男』
(デイル・ワッサーマン脚本)

いきなりですが、私の好きなミュージカルのセリフでございます。

今月号の水平社の特集は、まさに「あるべき姿のために戦った」方々のお話だと思えます。この問題は「あるがままの人生に、ただ折り合いをつけてしまっ、あるべき姿のために戦わない」姿勢を見せた東西両本願寺がトリガーになっているように思います。

あまり僧侶が「戦う」という言葉を使うのは、正しくないとおっしゃる方もいらっしゃるかもしれませんが、私は時と場合によっては、どんな立場であろうとも矢面に立ってその場に立ち向かうことが必要かと考えます。そのことを私は、「戦う」という言葉を使って表現したいと思えます。

私は保守的な考え方があまり好きではなく、「あるべき姿のために戦う」、そんな僧侶になつていきたいと考えております。みなさんは、どちらがいいと思えますか？

(東京1組 等光寺 土岐 孝広)